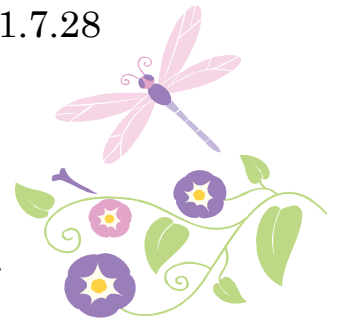




『私の忘れもの』

第25号

H21.7.28



☆ 認知症になった方への関わり方・・・経験から

この記事を書き始めて1年あまりが立ちました。この記事は、認知症だった母の在宅介護やヘルパーとしての在宅訪問、さまざまな学びやボランティア経験を長年重ねた中から得たものを、何かのお役に立てれば、との思いから書き続けています。

書きながら何時も思うのは、ここに書かれているように全てが順調に関わってきたのではありません。というよりも、さまざまな苦しみや迷い、怒りや後悔、そして気づきなどを重ねていながらその中から得たものです。今もボランティア活動を通して、よりよい関わり方の模索を重ねています。

在宅での介護は、さまざまな間接的な要因も加わってきて、想像以上に介護者の心身を疲弊させるということは、当事者でなければなかなかわかりにくいことです。そんな時、似た経験を持つ人に話を聞いてもらうだけで気持ちが楽になる、抱えている問題をどうすればよいのかが見えてくる・・・といった経験があります。認知症の家族を抱える方を対象とした家族会も、そうした場の一つといえます。昨年9月に情報紙の読者アンケートを行いました、今年6月にお返事を下さった方があります。「白い箱の会」でも、お話を聞く、情報をお伝えする・・・など、少しでもお役に立てればと考えています。お困りのことなど、気軽に下記の事務局までお電話いただければと思います。
(松尾 記)

☆ 失語症と認知症

脳梗塞や脳溢血など脳に対するダメージが原因で発症する点や、損傷を受けた脳の部位によって症状に違いがあることなど、失語症と脳血管型の認知症には発症の仕組みに多くの共通点があります。そして、失語症は他人との会話がスムーズに行えないことから認知症と誤認される事例もあるそうです。しかし、認知機能が低下して意思の疎通が困難に成る事と、思っている言葉が出てこずにうまくしゃべれない事は大きな違いです。先月号の「失語症の方々と」でも触れていますが、「絵を使ったり」「簡単な答えで済ませられるようにしたり」「漢字を交えて書いたり」といった、会話をする時の工夫によって症状の改善も望めるようです。

以前、言語訓練の見学をさせていただいた時に失語症の方々が病気を発症した事に罪悪感を持っていることを知りました。自らの病気にきちんと前向きに対峙している証拠だと思えます。このような心のありようは認知症の方には難しいようです。誤認は患者の方の気持ちを察して、しっかりと寄り添うことで防げると思えます。
(福原 記)

☆ サインを見逃さずに

認知症を発症する前に現れる幾つの特徴的な事例をお伝えしてきましたが、初めにその変化に気がつくのは、多くの場合当事者**本人である**と言われています。その時の本人の驚愕はいかばかりでしょうか？誰しも深く傷ついたり悩んだり、精神的にも大きなダメージを受けるはずですが、人によって違いがありますが、以前は得意であった料理や身の周りの整理整頓、そして人付き合いなど様々な事が上手にこなせなくなります。これは、単にこのような能力が低下してしまうだけでなく、心のありようが大きく影響しています。

本人の心理的な動揺によって、家族や周りの人、世の中への対応がそれまでとは大きく違ってくる事は、想像に難くありません。その方の今までの経歴や生活環境、普段の言動などを考え合わせて、正しく検証し判断出来ればこうしたサインを見逃さずに済むのではないのでしょうか。単独で判断を下すことは避けて複数で話し合うことをお勧めします。

『私の忘れもの』は、「福祉のまちづくりパートナーシップ区民活動支援事業」の助成をうけて印刷されています。尚8月号はお休みさせていただきます。

お問い合わせは「白い箱の会」事務局（松尾方 TEL:FAX 3998-9006）まで。